

## 関係住民の方々から寄せられたご意見

〈01〉

お住まいの市町村（例：帯広市）

豊頃町

### 1. 意見

別紙に記載

（別紙）

#### 1 地域特性に配慮した河川管理

札内川で自然再生計画が始まるのが追加されたのは、喜ばしいことである。今後、是非十勝川にも拡大していただきたい。

特に、下流部は、自然環境と地域産業の漁業という形で密着しており、サケ、シシャモの遡上、自然産卵場所として環境が改善されれば、豊かな自然環境だけでなく地域経済にも大きく貢献してくるものになると期待する。

#### 2 樹林化防止に向けた河川管理

十勝川の河川敷で平水位掘削をする場合、なるべく湿地状態となるような方法を選択していただきたい。十勝川の中流部では、高水敷の樹林化防止のために、湿地環境を作っていると聞く。

下流域では、食害をおこす鹿の隠れ場所として河畔林が利用されており、豊頃町では予算化して伐採している。掘削後に湿地環境が出来れば、湿地の生物に豊かな環境を提供出来るだけでなく、樹林化を防止することで、鹿の隠れ場所の除去、治水安全度の向上にもなる。

お住まいの市町村（例：帯広市） 帯広市

1. 意見

札内川は樹林化が進み、本来の札内川の河川環境とは違う状態となっている。本来の札内川の姿は、礫河原が更新される動的な河道である。札内川の自然再生の根底にあるのは自然攪乱システムの保全・再生にあると考える。

札内川自然再生は礫河原再生に主眼が置かれており、身近で検証可能な取り組みとなっている。礫河原に直接関係するケショウヤナギや鳥類、河川利用に重点を置くことは良いと思うが、これらに加えて、魚類の生息環境の保全にも着目してみてはどうだろうか。

札内川における魚類に関して次のような疑問点がある。

- ・札内川の魚類は、本来もっと豊富なのだろうか。
- ・サケがいなくなり、ニジマスが増えている環境でも良いのだろうか。
- ・魚類の生息環境は、過去にはもっと良好であったのだろうか。
- ・礫河原再生や自然攪乱により、魚類生息環境がどれだけ良くなるか。

このようなことも検証しつつ事業を進めていただきたい。

札内川の良好な自然環境を次世代に引き継ぐために、今後も様々な取り組みを行っていただきたい。

お住まいの市町村（例：帯広市） 幕別町

1. 意見

① 近年、かつて河道内に広く見られた札内川の礫河原が減少しており、札内川特有の河川環境・景観を保全するため必要な取り組みと考えます。

② 必要に応じて、地震・津波に備える対策は重要と考えます。

お住まいの市町村 (例: 帯広市) 帯広市

1. 意見

札内川の特徴である礫河原の再生に向けた取り組みについて賛成します。また、東日本大震災を教訓に防災・減災対策がなされることは重要であり、自然や環境に配慮しながら地震・津波対策が取られることを望みます。

お住まいの市町村 (例: 帯広市) 帯広市

1. 意見

・「勝川水系(札内川)の特質性と整備計画変更」の私の論点  
・平成9年の河川法改定による今後の河川空間の環境整備  
・「勝川水系の歴史の再生」代表格のサケの自然産卵に向けた環境整備  
これらの意見を別紙添付させていただきます。

平成 25 年 2 月 6 日

十勝川水系河川整備計画（変更）

## 意 見 書

十勝川水系札内川は、1 千万年前に誕生、隆起を繰り返してきた日高山脈を源流とし、十勝平野に広がる扇状地を形成する代表的な河川です。

扇状地は基本的に、山肌に降る雨や雪の水の流れが扇頂部付近で伏流し、扇央の礫層を流れ、扇端部で湧水する地層構成と成っています。

札内川が「もと清流日本一」だった所以とも言えるのではないのでしょうか。

伏流水などで綺麗な札内川を、安全で、自然並びに生物生息環境が豊かな河川を創出する事が、我々に課せられた責任だと考えます。

十勝川水系札内川の整備計画変更論点として、私なりに 3 点上げますと

1 点目は、雨や雪の水が集まり流れる「河川としての生業が健全」で「自然界の循環を損わない」治水整備計画が最も重要と考えます。

特に市街地築堤の、経年疲労状態(漏水、強度、盛土の粒度、護岸の有無と損傷等)が地域住民として一番不安な事です。地震・豪雨等で破堤すると地域は甚大な被害を被ります。転ばぬ先の「既存築堤の調査・試験などの成果」は、万全と成っているのでしょうか。

2 点目は、河川の生立・歴史に学び、変遷を経て、今後の札内川は「多様な自然環境」と「多様で豊かな生態系」とが「融合できる河川空間」と成っているか否かの検証と対策。

3 点目は、札内川の背景として、凛冽な日高山脈から眼下に広がる十勝平野を流れる風景が創造されます。河川景観の源は、流域の自然の豊かさと多くの生物並びに生息場所が多様で豊で有る事との「トータル的評価として地域固有の景観」が創出されるものだと考えます。今後も、札内川の「景観の創出に住民が参加」し、知恵を絞り汗を流す仕組みが、継続可能なのでしょうか。

これらの論点も、平成 9 年の河川法改定による「河川環境の整備と保全」を切っ掛けに、我々が『衣食足りて礼節を知る』に、気付かされる機会にも成りました。

高次元で豊かな生態系ピラミットが形成されている流域では、多くの人々が景観の素晴らしさに感動するものですが、残念な事の一つに、十勝川水系で現在置き去りにされている『サケ』の存在があります。

十勝川水系の生態系上、大きな役割を果たすサケが、遡上し自然産卵をすることが出来ない状態です。

歴史上から見ても十勝川水系のサケは固有種であり、十勝川で生まれたサケは十勝川に帰ってくる道しかないのです。

この事実を「川づくり計画」に組み込み、札内川の豊富な湧水で自然産卵の営みができるよう、同じ生物の一員、人が手を貸す事が、自然界との共生への一歩と考えます。

十勝川固有種のサケの稚魚が、日本沿岸からオホーツク、ベーリング海を回遊。それでも未成熟の時は、アラスカ湾までの2万km～3万kmを4～5年を駆けて回遊し個体を大きく成長させ、産卵のために母川十勝川を目指して回帰します。

戻りの途中産卵時から逆算し、約2ヵ月前(カムチャッカ沿岸付近)から餌を取るのを止め、まだ未成熟な生殖細胞の成熟度を加速させるために、蓄えた脂肪を与えるのです。

サケが強いDNAの子孫を残すために十勝川に命をかけて戻って来るのです。

人間の都合による制約条件が、自然産卵を阻む環境は非常に残酷な話だと思います。

この状況下で、自然が豊かで良好な生態系が形成されていると本当に言えるのでしょうか。

「たかがサケ、ですが、十勝川水系でサケが自然に営むことが出来たならば、より高次元の生態系ピラミッドが形成されます。

「されどサケ」により、多くの生物が計り知れない、生態系サービスを平等に授受する事が出来ます。

この機会に関係者と協議の上、十勝川水系河川整備計画変更の検討項目に、是非加えて頂きたいと考えます。

最後になりますが、未開地北海道が僅か60年余りで、私達が衣食足りてと感じるまでに成った背景には、「北海道開発局」の一元的な組織体制で、総合開発計画の基、弛みない社会基盤整備の成果と理解し、感謝しています。

時代の流れと共に、社会的ニーズも様変わりする昨今ですが、これからも一貫して大切なことは、維持管理を含む基盤整備イコール「国土の強靱化」だと思います。

更なる60年先を見定め、自信と誇りを持って「地域全体の幸福度の向上」に努めて頂く事をお願い致します。

お住まいの市町村 (例: 帯広市)

帯広市

1. 意見

地域の子ども達が、安心して水際まで行ける様な環境整備をお願いしたい。  
(磔河原の再生等は、良いスペースとなると思う)  
・東北下: 自然環境が、住んでみる身近にあるのもおもしろい。その場所に行ってみないの2つは話がかたまり。近郊の町内会、学校に、河川敷地施設等、提防の利用法等を再度周知し、河川が親水場となることを願います。  
~~~~~ここから上は公表します~~~~~

お住まいの市町村 (例: 帯広市)

1. 意見

地域住民にとって札内川が完成し、放流調節をすることにより雪解け・大雨による増水が以前と比べ少なくなれば、地域住民を水害から守ってくれている反面、札内川の河原を散策すると中川に木々が繁茂し礫河原が年々少なくなっているのを実感していました。十勝川水系河川整備計画の追加変更に記載されていましたが、礫河原再生への取り組みを進め、以前の札内川に戻してほしいです。安全性は維持し、環境は以前にと難しい課題への取り組みとありますが、行政のみなさんのがんばりに期待しています。

お住まいの市町村 (例: 帯広市)

1. 意見

ケシウヤナギは、札内川においてごく普通にみられる樹木ですが、道内、国内においては、希少な種で、ケシウヤナギの保全を踏まえた礫河原の再生の取り組みは、河川環境、景観においてたいへん重要なものと考えます。ぜひ、推進していただきたいと思っております。また、十勝の児童生徒に氷河期の遺存種であるケシウヤナギが身近にあることを河川環境学習などを通じて、もっと知ってもらいたいものです。

お住まいの市町村 (例: 帯広市) 帯広市

1. 意見

木が多くて、川まで近づきにくい。昔はこんなに木が多くなかったと思う。そのせいで礫河原にすむ生き物が減っているのであれば、再び戻ってくるようにしてほしい。

昔は川狩りや釣りなどを家族で楽しいでいたのに、そういったことが全然出来なくなり寂しい限りです。

お住まいの市町村（例：帯広市） 池田町

---

1. 意見

- ・パワーポイントの平成17年の写真は、礫河原と樹木がほど良く、川らしい景観だと思います。また、礫河原のほうが川に近づきやすく、色々な形の石などは子供のころ大変興味がありました。自分の子供達にも体験させてあげたいですが、川＝危険な場所というイメージばかりが先行しているように思えます。自然再生事業と合わせて積極的に川でのイベントを実施してはどうでしょうか。
- ・札内川は平成17年を最後に清流日本一から遠ざかっております。礫河原の減少と何か関連があるのでしょうか。
- ・一方で、昨年度の破堤した音更川と同様、急流河川である札内川でも同じようなこと発生するこることが心配です。相手は自然ですので計画流量以上の流量が発生した場合や災害時の被害を最小限にする対策も実施していただきたいと思えます。

お住まいの市町村（例：帯広市）

---

1. 意見

● 札内川における取り組みについて

札内川は、日高山脈を背景に広い礫河原を網状に流れる特有の景観をした清流であり、氷河期の遺存種であるケショウヤナギが生育していることから、景観・生育保全における取り組みについて大いに賛成します。

帯広近郊には景観を生かした観光スポットの数は少ないと、以前から考えていたところでしたので、礫河原が再生された暁には、ビューポイントの設置や散策路等を整備していただき、だれでも気軽に景観を楽しむ事が出来るような場所になれば良いと考えます。またケショウヤナギが氷河期の遺存種である事について、管外の人々にはあまり知られていないと思ひ、観光の目玉になるのではと考えます。

---

お住まいの市町村（例：帯広市） 音更町

---

1. 意見

津波が発生したときの避難経路も含めた周知について、情報提供の強化をしていただきたい。過去に津波が発生したとき、実際に河口で釣りをしており、津波の状況把握に時間がかかりましたが、難をのがれました。また、津波が川に上がってきた時に、水が川からあふれないようにしてほしい。地震で堤防が崩れた直後に津波が上がってきたら、大変だと思います。地震で崩れないような強い堤防にしてほしい。地元住民への周知・避難訓練と、河川整備をお願いします。

---

お住まいの市町村（例：帯広市） 帯広市

---

1. 意見

札内川で釣りをすると、外来種であるニジマスばかりが釣れます。

もっと、ヤマメが釣れるような川にしていきたい。

また、サケが上がってこられるようにしていきたい。

お住まいの市町村（例：帯広市） 芽室町

---

1. 意見

平成 23 年 3 月の東北地方太平洋沖地震での津波被害はもちろん、津波が河川を遡上してくる様子がとても印象に残っています。つい昨日も震度 5 強の地震が発生しましたが、帯広開発建設部さんの対策工事等により大きな被害はなかったということで、日頃の事業の効果は確実に出てきているのかなと思います。

ですが、津波は想定ではとてつもない高さが予想されています。

洪水同様に災害時の被害を最小限にするための、ハード・ソフト対策は早急をお願いしたいところです。また、子供も含めた地域住民への普段からの防災教育は非常に有効であることは、釜石の例ではっきりしています。町で防災教育活動には限界があるかと思いません。開発局も津波に対する防災教育に力を入れていただければ幸いです。

お住まいの市町村（例：帯広市） 上士幌町

1. 意見

十勝川水系河川整備計画変更原案に対する十勝自然保護協会の意見を述べる。今回の十勝川水系河川整備計画変更原案は、「札内川の礫河原再生の取り組み」を十勝川水系河川整備計画に盛り込むことが主要なテーマとなっている。

「近年、河道内の樹林化が著しい札内川では、かつての河道内に広く見られた礫河原が急速に減少しており、氷河期の遺存種であるケショウヤナギの更新地環境の衰退が懸念されている」だから「礫河原再生の取り組み」が必要だ、というのが提案の骨子だ。ならば、礫河原が急速に減少した原因について語られていなければならないのだが、この変更原案には、このことについての記述が全くない。したがって、十勝自然保護協会は、なぜ礫河原が急速に減少したのかについて記述することを求める。

帯広開発建設部は、礫河原が急速に減少した原因について考察していなかったわけではない。この変更原案を作成するに当たり、札内川技術検討会を設置し、帯広開発建設部はこの検討会に「河道内樹林化の原因分析」なる資料を提出して、河道内樹林化についての見方を明らかにしている。

それによると、「融雪出水の冠水は樹林化に大きく影響を与え」「冠水する時期や頻度は河道内樹木の生育に影響を与え」とし、H18～22年はH10～17年に比べて平均年最大流量が半減し、融雪期最大流量も減少傾向ある、だから樹林化が進行していると原因分析をしている。

この原因分析は、札内川技術検討会での議論を経て作成された札内川自然再生計画書に、近年の年最大流量や融雪期の流量の減少傾向が河道内樹林化の主要因として引き継がれている。

1998年、H10年以降の高々15年ほどの流量変動を基に河道内が樹林化している、だから礫河原の復元をしなければならないとの論理は、札内川の歴史の無視、あるいは札内川の歴史への無知と言わなければならない。

札内川がいつから網状流河川すなわち砂礫川原（帯広開発建設部のいうところの礫河原とほぼ同義。地形学辞典（町田ほか編）では「川原」を採用しているのでこれに従う。また砂を含まない礫川原はないから、砂礫川原とする）を持つ河川であったか、誰にも正確なことは分からないのだが、光地園礫層が形成された更新世中期（78～12.6万年前）から札内川は砂礫川原をもつ網状流河川であったと考えていいだろう。この長い歴史のなかでは、降雨量の減少などにより河畔林が拡大し砂礫川原が縮小したこともあったに違いない。しかし数十年に1度、あるいは数百年に1度の大雨によって、河畔林が流され砂礫川原が出現したことだろう。だからこそ、砂礫川原を生育地とするケショウヤナギが今日まで世代を重ねることができたのである。

札内川自然再生計画書によれば、上札内橋付近では、平成に入った頃、つまり1989年ころから砂礫川原に樹木が定着したといい、第二大川橋付近ではH17年、2005年頃までは砂礫川原が維持されていたという。札内川の砂礫川原を写した空中写真で最も古いものは、1948年、昭和23年に米軍が撮影したものと思われるが、これには広々とした砂礫川原が写っている。1963年、1977年、1982年の空中写真（国土地理院撮影）でも立派な砂礫川

原を確認できる。

札内川では1955年、1962年、1972年、1981年に洪水が発生したことが知られている（札内川自然再生計画書などによる）。帯広開発建設部によると1955年についてはデータが残されていないとのことだが、1962年と1972年の洪水における第二大川橋での最大流量はそれぞれ毎秒1250立方メートルと1400立方メートル程度と推定される。しかし、1973年以降、この第二大川橋では最大流量が毎秒800立方メートル程度にしか達していない。つまり、1948年以降の札内川の立派な砂礫川原は、7年から10年間隔での大雨による大量出水によって維持されていたが、1973年以降、第二大川橋で毎秒1000立方メートルを超える出水がないため1989年頃から河畔林が拡大してきた、と理解すべきである。

では、1973年以降札内川の集水域では、大量出水をもたらす大雨が降らなくなるような気候の変化が生じたのだろうか。そのような事実はないだろう。1998年、H10年以降、札内川の集水域では大量の降雨があっても大量出水しない仕組みができてしまったのである。大量出水しない仕組みとは、札内川ダムによる流量調整である。

2011年、H23年9月の大雨では札内川ダムに毎秒630立方メートルの流入があったが、毎秒130立方メートルだけ放流された。この時の第二大川橋での最大流量は毎秒552立方メートルあったから、札内川ダムで貯留しなければ毎秒1000立方メートルを超える流量となったことだろう。また2001年に第二大川橋で毎秒800立方メートルの最大流量を観測しているが、この時も札内川ダムで貯留しなければ毎秒1000立方メートルに近い流量となっていたと推測される。つまり1973年以降も砂礫川原が拡大するチャンスが2回あったということである。

今回、札内川技術検討会の委員長を勤めている北海道大学大学院教授の中村太士さんは、新聞のコラム（北海道新聞2009年7月8日付魚眼図）に次のように書いている。

「日本の多くの川で『樹林化』が進んでいる。（中略）樹木が繁茂する理由はさまざまであるが、その多くは川が変動しなくなり、『洪水攪乱』が減ったことに原因がある。（中略）今の日本の川では、ダムや取水によって流量が低下もしくは安定し、河川改修によって『滯筋』が変動しなくなっているのが特徴である」。

中村さんの言う通りのことが札内川で起こっていたのである。そして札内川技術検討会（第1回）の議事概要には「樹林化の原因の一つとして、札内川ダムによる流量調節や供給土砂の減少が考えられる。工学的な判断を行う上で、流量だけではなく土砂の情報も重要」と記されている。これは河川工学研究者の発言と思われるが、河川に精通している者にとってダムが樹林化を促進することは常識といってよい。それにもかかわらず、札内川自然再生計画書に札内川ダムがもたらす「樹林化」について書かれなかったのは不可解なことである。そしてもう一点不可解なことがある。前述のように技術検討会で委員が指摘した札内川ダムによる供給土砂の減少について書かれていないことである。札内川ダムそして戸蔭別川の砂防ダム群が、山間部で生産された土砂の流下を妨げていることは明らかである。長い時間でみるなら、現在ケショウヤナギが生育する流域の砂礫は下流に運ばれているのであり、上流から砂礫が補給されなければ、河床低下による河岸の段丘化が進みケショウヤナギの生育適地は縮小することになる。

ケショウヤナギは、山岳部において岩屑生産が多く河川の砂礫移動の激しかった氷河期には北海道のもっと多くの河川に生育していたが、氷河期が終わると岩屑生産が減少し砂

礫移動も乏しくなったため生育適地が消失し分布が縮小したと推測される。つまりケショウヤナギの生存には、出水による砂礫川原の出現とともに砂礫の供給が鍵を握っていると考えるのが妥当である。

帯広開発建設部が変更原案でダムのことには触れなかったのは、ダムの負の側面を隠したいとの意図があったのではと疑わざるを得ない。もしそうならば、国民を愚弄するものである。十勝自然保護協会は、今回の計画変更にあたって、札内川ダムが札内川の樹林化促進の要因であること、そしてダムが砂礫の流下を妨げていることを明記するよう求める。例えば、「近年、河道内の樹林化が著しい札内川では、かつての河道内に広く見られた砂礫川原が札内川ダムでの流量調整によって急速に減少するとともに、今後砂礫の供給が困難になることから、氷河期の遺存種であるケショウヤナギの更新地環境の衰退が懸念されている」とすべきである。

私たちは自然が発する事実に謙虚でなければならない。事実を無視して適切な自然再生などできないからである。「札内川の礫河原再生の取り組みについては、礫河原再生の目標や進め方等について記載した『札内川自然再生計画書』を踏まえ」てやるというのであれば、札内川ダムと戸蔦別砂防ダム群の影響についてきちんと分析し、その結果を踏まえて、この札内川自然再生計画書を書き直すべきである。

変更原案の用語について一言いっておく。札内川について「網状に蛇行して流れる」と書いているが、網状とは河道の中の水流（流路）の状態であり、蛇行とは「河道が屈曲している状態」（地形学辞典）をいう。したがって「網状に蛇行」は落ち着きの悪い表現である。蛇行を削除して、「網状に流れる」とするか、「網状河道が蛇行して流れる」（蛇行しない自然河川はないからくどいが）とするほうがいい。

帯広開発建設部治水課は、これまで当会の質問あるいは意見に対し、速やかに対応することがほとんどなかった。札内川自然再生計画書の「図 8-1 自然再生計画における地域及び関係機関との連携のイメージ」には市民団体の意見を聞き、河川管理者は情報の発信・広報をするとされている。これを絵に描いた餅に終わらせてはならない。河川行政に責任を負う機関として、たとえ不都合な意見や質問であろうと速やかに、かつきちんと説明していただきたい。

十勝自然保護協会は札内川自然再生計画が自然の摂理に背いたものにならないよう監視活動を続け、必要があれば意見をすることを表明する。

<16>

お住まいの市町村 (例: 帯広市) 帯広市

1. 意見

札内川は石礫河原が広がり、またそれにより水質日本一を何度も取った清流のイメージが強い、非常に個性のある河川だと感じています。生息する動植物もケショウヤナギを代表として特徴的だと思えます。

樹林化が進む札内川を今後ケショウヤナギの生育状況をモニタリングのポイントとして見続け、札内川らしい環境が残る方法を模索してほしいと思います。

<17>

お住まいの市町村 (例: 帯広市) 帯広市

1. 意見

札内川と札内川ダムとの関連性についての文章がなく、あえて触れられていないようにも見えるが、ダムについての文は入れないのか(共存・共生など)

<18>

お住まいの市町村 (例: 帯広市) 帯広市

1. 意見

私は永く十勝に住んでいます。近年は河川の木が堤防の高さを超える高木になり、樹木が河道を覆っている状況を見て、洪水時に支障にやはりと危惧しています。今回の石礫河原再生等の札内川における取り組みについては、大いに評価です。

また、札内川のみならず、高木樹林の伐採を積極的に進めて頂き、洪水時の安全確保を本願としています。

お住まいの市町村 (例: 帯広市)

1. 意見

近年、集中的なゲリラ豪雨の発生により、河川の増水<sup>等</sup>により、河岸浸食が激しく、堤防決壊など重大な災害も起こります。この原因として、河川の蛇行が激しく、カーブなどを利用して、洪水を緩和しています。河川内に存在する、大きな樹木帯が護岸の役割で、河川の固定化を促しているのでは、...

水位増加の際、河川変化に影響のため、河畔林伐採は行わず、は、より利用し、河川空間の整備を希望します。

お住まいの市町村 (例: 帯広市) 上士幌町

1. 意見

今回の変更案は地震津波対策と札内川の樹林化に対する取り組みが主な変更点ですが、ここでは札内川の樹林化への対策について意見を述べます。

私は、2010年7月に川と河畔林を考える会、十勝自然保護協会、十勝の自然史研究会が共同で開催した「2010川の講座 in 十勝」に参加して、平川一臣北海道大学大学院教授の講義を受けました。なお、平川教授は第四紀学、周氷河地形環境、第四紀地殻変動の専門家です。

平川教授は、講義のなかで「河川は、自己制御することによって、可能な限り効率のよい形、すなわち横断形、縦断形を維持しようとする。つまり砂防ダムを始めとして人間の手がかかると、河川は川幅、水深、流送河床物質の粒径などの間で、内部調整、自己制御をやって確実に応答している。人の愚かさを試しているとも言える」といい、「河床の砂礫を上流のダムが止めてしまうと、それより下流の砂礫供給量・運搬量に見合った川になってしまう。戸蔦別川や札内川はダムの建設前後で別の川になってしまったことを意味する。現在は、その変化への適応・調整、すなわち河床低下の過程にあり、河畔林の繁茂はその一端である」とし、「札内川では、従来の堤防の位置などから推測すると、数メートルも河床が低下しており、今では堤防から水が溢れることはまずないだろう」「札内川は札内川ダムや戸蔦別川に造られた多数の砂防ダムによって著しい河床低下を生じ、高水敷はヤナギが繁茂してすっかり姿を変えてしまった」と述べていました。

札内川から砂礫川原が激減したのはダムによって砂礫の流下が止められてしまったことが原因であり、また河川敷にヤナギなどが繁茂したのは札内川ダムの貯水機能によって流量が抑制され洪水が生じにくくなったことも関係しているのです。したがって、ダムを造ってしまった以上、砂礫川原が減少し河畔林が繁茂することは当然の結果と受け止めなければなりません。

十勝川水系河川整備計画変更原案の「(6) 札内川における取り組み」(89 頁) を読むと、「近年、河道内の樹林化が著しい札内川では、かつての河道内に広く見られた礫河原が急速に減少しており、氷河期の遺存種であるケショウヤナギの更新地環境の衰退が懸念されている。そのため、ケショウヤナギ生育環境の保全に加え、札内川特有の河川環境・景観を保全するため、礫河原の再生に向けた取り組みを行う」と書いてあるだけで、札内川ダムや戸蔦別川の巨大砂防ダム群の影響に全くふれていません。

「札内川の礫河原再生の取り組みについては、礫河原再生の目標や進め方等について記載した『札内川自然再生計画書』を踏まえ」ということですので、札内川自然再生計画書のほうに目を通しました。6 頁に、「昭和 47 年より直轄砂防事業として札内川上流域において砂防えん堤や床固工群の整備を実施してきた。昭和 60 年には、治水安全度の向上、高まる水需要に対応した水資源の開発を図るため、洪水調節、流水の正常な機能の維持、かんがい用水、水道用水の供給、発電を目的とした札内川ダムの建設に着手し、平成 10 年に供用を開始した」とあるのですが、これらのダムが札内川にどのように影響したかについては一言も書かれていませんでした。

ダムなどの構造物が河川を大きく変えることは河川学では常識であり、河川技術者も十分知っているとは平川教授は言っていました。それにもかかわらず、十勝川水系河川整備計画変更原案にも札内川自然再生計画書にもダムの影響について触れていないのはどうしたことでしょう。

札内川ダムも戸蔦別川砂防ダムも帯広開発建設部が良かれと思い、多額の税金を投じて建設したものです。これらのダムのために札内川の自然再生が提案されたとしても、隠し立てすることではないでしょう。

札内川自然再生計画書では、砂礫川原の再生のために河床攪乱が提案されていますが、ダムによって砂礫の流下が止められて砂礫川原が減少しているのですから、たとえばダムからの放流量を増やして意図的に洪水状態をつくりだし河床の攪乱を促しても砂礫川原は再生されないばかりか、さらに河床の低下が進み、場所によっては基盤が露出するものと思われる。平川教授は、礫がなくなって粘土層が露出している戸蔦別川の写真を提示していました。礫層がなくなり、粒径の小さなものが流されるようになるのは大問題とのことです。また、このような状態になると増水のたびに流路に面した高水敷の縁が浸食されて崩壊し、高水敷に堆積している砂礫はさらに流されてしまいます。もちろん、高水敷に生育しているヤナギも根元から浸食を受け、流木となります。

河畔林を伐採し重機などで攪乱して砂礫川原をつくりだしても、上流から砂礫が供給されないのですから、増水のたびに砂礫が流されて減少していきまますし、河床低下がさらに進むと考えられます。このような方法は一時的には砂礫川原を生じさせるかもしれませんが、永続的な砂礫川原の再生にはつながらないでしょう。砂礫を人為的にどこからか運んでこない限り砂礫川原は再現されませんし、運んできたとしても増水によって下流に流されてしまうので、砂礫川原を維持するには人によって継続的に砂礫を運んでくるしかありません。しかも、このような手法では、砂礫地を生息・生育地としている動植物に大きな影響を与えます。

砂礫川原を維持するのであれば、ダムで川をせき止めてはいけない、という教訓を十勝川水系河川整備計画変更原案に盛り込まなければなりません。

私は、納税者である国民の前にすべてを明らかにすべきと考えますので、札内川ダムと戸蔦別川の砂防ダムの建設の結果として砂礫川原が激減したこと、またこのような河川における砂礫川原再生の手法は確立されておらず永続的な砂礫川原の再生はきわめて困難であることを十勝川水系河川整備計画変更原案および札内川自然再生計画書に明記するよう求めます。

なお、ダムによる砂礫の流下の抑制は海岸線の後退にもつながっています。海岸線の後退は全国で深刻な状況になっており、人為的に砂の運搬などの対応がなされているところもありますが、いくら運んでも沿岸流や波によって浸食されるので際限なく砂を運ばなくてはなりません。ダムによって自然のバランスを崩してしまうと、人間の力では元の状態に戻すことはできません。

昨今は自然再生事業が行われるようになってきましたが、壊したなら再生すればいいというものではありません。人が構造物によって自然をコントロールしようとするれば、その弊害が必ずどこかに現れるのです。とりわけ河川では平川教授の言うように、人の技術ではどうにもならない取り返しのつかない状態にまでなってしまう。そうなれば自然再生は不可能です。このことを河川管理者は肝に銘じなければなりません。

お住まいの市町村（例：帯広市） 更別村

1. 意見

札内川には、遷移の段階によって砂礫の河原、自然草地、ヤナギ低木林、ハルニレーヤチダモの高木林など様々な環境が存在し、礫河原では砂礫地に巣を作るコチドリやイソシギおよび河原で昆虫を採餌するセキレイ類、草地にはコヨシキリやホオアカなどの草原性の鳥類、ヤナギ低木林にはアオジやベニマシコなど低木林や疎らな林に生息する鳥類、高木林はキツツキ類やカラ類など森林性鳥類、そして小鳥類を餌にする猛禽類といったように、それぞれの環境に応じた様々な鳥類の生息地になっている。

しかし、札内川では年々樹林化が進行し、以前は広く分布していた砂礫地が大幅に減少しているため、砂礫地に営巣するコチドリ、イソシギの営巣環境や生息数が減少しているものと思われる。

礫川原の再生事業で人為的に礫河原を創生することによって、礫河原に特徴的に見られるコチドリ、イソシギなど生息数は再び増加する事が期待される。

しかし、人為的に1つの環境を増やすことは、環境のバランスを損なう可能性もある。例えば大規模に礫河原を再生したために自然草地の面積が大幅に減少するなどといった事のないように、過去の植生の状況や鳥類調査の結果などをふまえて、遷移の段階で現れる様々な自然環境をバランスよく維持していくような事業をおこなって欲しい。

また、砂礫地の地上に営巣するコチドリ、イソシギだけではなく、自然草地や河畔林に生息する鳥類には地上の草むらに営巣する種も多い。事業を実施するにあたっては巣の踏み荒らしや繁殖の阻害にならないように、工事の時期を鳥類の繁殖期とずらすなどの配慮をおこなっていただきたい。

お住まいの市町村 (例: 帯広市)

豊頃町

1. 意見

別紙

この度の十勝川水系河川整備計画の変更に関し、防災の観点から意見を述べさせていただきます。

私たち豊頃の町民は、父祖の代から十勝川の流れと共に暮らしてきました。

商工業、農林水産業、建設業と多くの町民の営みを支えてきたのが母なる大河十勝川であります。

また、十勝川は流域住民に恐怖と大きな被害をもたらす川でもありました。

私の記憶では、昭和30年9月には、死者1名、重症者8名、床上・床下浸水725戸の大きな被害に遭い、引き続く昭和39年には6月と8月の繰り返しの水害に遭遇し、その後も数え切れない水害を経験しております。

また、平成2年11月の大雨による水害を最後に、人家に及ぶ大きな水害は見られなくなったものの、残念ながら農水産業に及ぼす水害はその後も後を絶ちません。

この間流域住民の生命財産を守るための河川整備には多くの方々の英知と予算が投入されたことは容易に想像されるところであります。

また、河川に関係する災害は、水害のみならず平成15年9月「十勝沖地震」で私たちが経験したように、築堤の崩壊といった過去にない異変ともいえる状況でした。

もしも、このような地震と大雨が時を近くして発生したならばといった危機感をもったものです。

幸いにも、その後開発建設部による築堤の耐震化等の工事も進み、24時間体制での監視、水防拠点としての資機材の集積等の対応に加え、本件『十勝川水系河川整備計画(変更原案)』にも防災関連の項目が重点的に盛り込まれるに至り、流域住民としては、まずは理解を示すものであります。

防災対策に完全は無いものと考えます。が、しかし万全を期そうとする各種取り組みには心から敬意を表するものであります。

今後は、人命財産の保護と併せ、基幹産業である農水産業に対しても、その英知を今一度結集され、農地の冠水対策、流域内水の排除対策、関係樋門開閉の自動化、太平洋に流出する十勝川上流域からの立木等の対策についても積極的に取り組まれるよう意見として申し上げさせていただきます。

お住まいの市町村（例：帯広市） 帯広市

1. 意見

札内川の利用に関しまして、意見を述べさせていただきます。私は帯広市のボランティア団体『森の少年隊』の指導員をしております。私たち『森の少年隊』は、北海道・帯広市の特色ある街づくりの中で、自然保護、愛護の精神を生かし、青少年のもつエネルギーと冒険心を正しく導くために1977年に創設されました。森の少年隊は主に、帯広市の帯広の森を活動拠点とし、小学校5、6年生を対象として、様々な活動を行っています。活動の目的は、共同生活体験、自然観察と自然学習、自然の中で楽しく遊ぶ、緑化事業の実践の4つです。主な活動内容としては、帯広の森での植樹・育樹活動、植生調査、巣箱の作成・設置・観察です。また、帯広の森だけではなく、帯広市を取り囲むグリーンベルトとして、十勝川、札内川の河畔林についても活動の場としており、札内川では、札内橋の左岸の桜並木の植樹、育樹を行っています。また、十勝川では帯広市浄化センター裏の堤防に桜の植樹を行っています。さらに、足寄町でラワンブキを観察したり、札内川上流のピョウタンの滝や、戸蔭別川上流の岩内仙境で3泊4日の子供たちが自炊する「生活キャンプ」を行ったりと、様々な活動を行っています。運営スタッフはほとんどが『森の少年隊』のOBであり、私も14期生として入隊してから20年以上関わり続けています。

最近では植樹活動や自然観察の他に、川の虫の種類を調べたり、川の水のきれいさを水の透明さを比較する等で勉強することで、森のみでなく、それを構成する環境について、自分たちが教えらるる範囲で子供たちに体験してもらえるように、学習や遊びを行っています。こういった学習については、駐車場や川へのアクセスがとても容易で、活動に便利な中札内村の中札内橋付近で行う事が多いのですが、最近ではこうした活動に適した広い礫河原区域が減ってきています。中札内橋付近でさえも、活動前の河川の状況によっては、植物の繁茂などにより河道へのアクセスが悪い個所が多く、活動場所の選定もなかなか難しいのが現状です。

十勝川整備計画の一部変更では、札内川特有の環境である礫河原の再生等の取組が追加されていますが、ケショウヤナギ等特有の河川環境・景観の保全と合わせて、環境学習・活動の場の創出や保全、子供たちの利用のし易さにも十分考慮して頂きたいと思います。このうち環境学習としては、河川の果たす役割について理解を深めることを目的とし、札内川本来の姿である礫床河川と他の河川との違い・特徴について、見る・触るなどの実体験学習を行う場合、礫床河川の再生後には、現在に比べより明確に、他の河川との違いや河川の自浄作用等河川の果たす役割が体感できると思います。また、河道へのアクセスが良くなりスムーズな活動運営ができること、さらに、現地の見通しが効くため安全管理もしやすいことも重要な点です。

また、我々としては、礫河原の再生等の取組に微力ながらも参加できると、尚良いと考えております。そして、その活動を通じて、色々なことを学びたく思っています。例えば、札内川の中州で活動を行うに当たり、中州に繁茂しているヤナギについて、なぜ中州に生えるのか、なぜ成長が速いのか等を学んだ後、活動場所を伐開し、礫河原について学ぶ、等を考えております。この場合、ヤナギについて深く知る必要があると思いますが、これに関しては私たちのような、関心のある住民を対象とした講習会等を定期的に行っていた

だけると助かります。その時に間伐の方法なども教えていただけると嬉しいです。

一河川利用者として、また、流域に生活する一市民として、今回意見を述べさせていただきました。よろしくお願いいたします。

お住まいの市町村(例:帯広市) 帯広市

1. 意見

札内川は、過去に何度も日本一に選ばれました。私達市民にとっては誇り高い川でもあります。

それは、自然の法則、循環によって育かれたもので、人の力ではありません。

川との共生を考えた一提案ですが、川の健康、人の健康を共に託して、さまざまな「川流し」をしてみたいと、考えています。小さな川で良いのです。実現できると嬉しいです。